

令和２年度第３回乳幼児教育保育推進体制の充実・活用強化に関する懇談会 議事要旨

１ 開催日時

令和３年３月２３日（火） 午後３時００分～午後４時３０分

２ 開催場所

広島市役所北庁舎 ６階 教育委員室

３ 出席者等

(1) 学識経験者・教育関係者・関係団体代表者

朝倉 淳【座長】	(安田女子大学 教育学部 児童教育学科 教授)
徳永 隆治	(安田女子大学 教育学部 児童教育学科 教授)
渡邊 英則	(認定こども園 ゆうゆうのもり幼保園 園長)
松尾 竜	(広島市私立保育園協会 理事長)
米川 晃	(広島市私立幼稚園協会 理事長)
河面 睦子	(広島市保育園長会 代表)
坂本 玲子	(広島市立幼稚園長会 会長)
安田 仁	(広島市小学校長会 代表)

(2) 事務局（広島市こども未来局・広島市教育委員会事務局）

保育企画課長、保育企画課調整担当課長、保育指導課保育園運営指導担当課長、
教育企画課長、指導第一課長、教育センター次長

４ 議題（公開）

- (1) 幼稚園・保育園等が行う子育て支援の取組について
- (2) 「広島市幼児教育・保育ビジョン実施方針」の策定について（報告）

５ 傍聴人の人数

３名

６ 懇談会資料名

- ・ 幼稚園・保育園等が行う子育て支援の取組について（資料１）
- ・ 広島市幼児教育・保育ビジョン実施方針（資料２）

７ 出席者の発言要旨

- ・ 幼稚園・保育園等が行う子育て支援の取組について

事務局の説明に対し、以下のような意見・質問等があった。

※１ ○は学識経験者・教育関係者・関係団体代表者、●は事務局職員の発言を表す。

※２ 「乳幼児教育保育アドバイザー」は「アドバイザー」と、「乳幼児教育保育支援センター」は「センター」と表記している。

● 資料１の説明

- 今後、センターは、保護者に対してオンライン等を活用して、直接アドバイスを行うことができるような仕組みを考えているか。

また、地域における子育て支援として、子育て経験者を活用した支援はできないか。

- センターと保護者のパイプ役が幼稚園・保育園等の役割だと思うが、近年、ハイリスクな家庭が増えているので、行政と園等が一体となって取組を進めていくことが必要だと感じている。例えば、保健センターから園等へハイリスクな子どもに関してつないでもらうことがあるが、その子どもが入園すると、保健センターと保護者や園等との関係が途切れてしまうといったことがある。課題を抱えている子どもは、入園後も新たな課題が生じることが多いので、行政と園等が一体となって支援していくことが大切だと思う。センターをうまく活用できるとよい。
- 今のセンターは、園等を通して保護者を支援する仕組みになっている。また、オンライン等を活用した支援については、ハード面の整備が遅れている。こうしたことから、現段階ではセンターが直接保護者の相談に応じる仕組みになっていないが、将来的には検討していきたい。
園等からセンターへ情報を入れてもらい、センターから行政の担当部署につなぐという行政と園等が一体となった支援の仕組みができればと考えている。
- 子育て経験者による子育て支援については、後ほど説明する「幼児教育・保育ビジョン実施方針」において、家庭や地域の子育て支援の充実に取り組む中で、地域で子育てを応援する意識の醸成を図っていくことにしている。
- 孫を持つ世代の高齢者を対象とした講座を開催して、子育てのアドバイザー的な役割ができる人材を育てていくなど、組織として取り組むことも必要ではないか。それと同時に、隣人など近所に住む人などと気軽に話ができるような関係づくりができればよいと思う。三世帯家族で子育てを行う時代ではなくなり、ほとんどの家庭が核家族となっているので、自分の祖父母だけでなく、近所の人にも気軽に相談できるような関係を作る取組ができないだろうか。
- 保護者の支援は園等を通して行うことが基本となっているが、保護者の困りごとを園等へ言いにくい場合もあるのではないかな。そのような場合、保護者が直接、センターへ相談するというようなことは可能なのかな、あるいはセンター以外が行うのかな。
- 子育て相談については、広島市の取組として、各区の地域支えあい課やオープンスペース等で相談に応じる仕組みがある。
- アドバイザーが育児講演会で保護者向けに話をしたり、アドバイザーが個別の発達相談に応じたりするなどの保護者支援の取組を行っている。また、アドバイザーには、保育士からの相談にも応じてもらえるので、アドバイザー派遣の制度を有効に活用している。
さらに、各区の福祉課と連携し、オープンスペースに保育士を派遣して子育て支援等を行っている。子育て支援を行うことに関しては、人員体制や園での相談場所の確保など難しい面もあるが、保育士が気軽に保護者の相談に応じることが、次年度の入園につながるケースもある。
- アドバイザーの行う子育て支援については、園等の保護者だけでなく、公民館で開催している子育てサークルや園等に来る地域の未就園児の保護者に対しても、講話や悩みの相談に応じる等の支援を行っている。
- 子育て講演会等の実施は、効果的で成果が上がっていると思うが、そうした場に参加されない方や、園等へも来られない方へのアプローチはどのようにしているのかな。
- 園や地域と関わりがある保護者に対しては支援がしやすいが、そうではない保護者への支援について、センターでニーズを把握するのは難しい。園等や区役所、地域の方等から情報を得ることなどにより、ニーズの把握に努めたい。

- 自園では、月曜日から土曜日まで園開放をしており、地域の未就園児の親子にも気軽に園へ入って来てほしいと思っているが、セキュリティの面から門は閉めている。問題を抱えている人は特に、園へ入りにくいと感じているのではないかな。
例えば、定期健診などの機会に、「マイ保育施設紹介カード」といった近隣の受入れ施設が記入してあるカードなどを配布し、保護者がそれを園へ持参する等、問題を抱えている人も園へ入りやすくなるようなきっかけや仕組みを作るとよいのではないかな。
- 子どもの養育の責任は親にあるということは基本であるが、親育てという面では、幼稚園・保育園等が大きな役割を担っていると思う。
市立幼稚園の取組としては、登園時と降園時に保護者と職員が毎日顔を合わせて、日頃の子どもの成長を喜び合えることが大きいと思う。何気ない会話から、家庭の状況が分かり、子育て支援の手掛かりになることもある。また、保護者会を活用して保護者同士の信頼関係を構築して悩みを相談し合えるようになるという利点もある。
横浜にある港北幼稚園では、保護者が自己発揮しながら笑顔で活発にサークル活動をされており、まさしく園による親育ての取組だと感じた。
- 保護者と子どもの関係が近いか遠いかという視点が、子育て支援を始めるに当たってのスタートであった。働いている保護者などは、子どもとの距離が遠いと感じる場合がある。別にコロナ禍における課題もあるが、女性が働くのが当たり前の世の中になっており、幼稚園・保育園等に関係なく、「子どもを預けて働きたい人」と、「子どもの育ちを楽しみたい人」に2分化している。ここにどう関わっていくのかが難しい。子育てが難しいと感じている保護者は、孤立する傾向にある。働いているかどうかにかかわらず、保護者同士がつながることで、子どもと同じように共に育ち合う関係ができてくる。子育て支援の仕方については、上から目線で研修を行うといったものではなく、「一緒に子育てを楽しみませんか。」というスタンスで素朴な取組の方がよいのではないかな。
センターの取組としては、人をつなげていく場をどう作るかを考えるべきである。例えば、卒園児の保護者が子育て支援の拠点でスタッフとして活動する仕組みを作ることや、園等の持つ専門性を発揮し、子どもの育ちを理解して保護者同士がつながっていくことを通して、子育ての楽しさを保護者や地域の子育てをしている人達にきちんと伝えていくといったことが考えられる。
子育てが2分化している中で、「子どもは預けて働けばよい」と考える人が増えていくことへの危険性に対して、行政や各園で何をするのかが問われている。
例えば、子どもを預かっていてケガをさせたことからトラブルが起きることがあるが、子どもはそもそもそのような経験の中で育つといったことを誰が伝えるのか。拠点園やセンターで、何らかの仕掛けをしながら、子育てをしている人達に、「一人で悩まなくてもよい」ということを伝えていくことが、今後のセンターの大きな役割である。
レジャージェミリア市の取組のように、3～5歳児の通う幼稚園的な施設だけでなく、保護者が働いているかどうかにかかわらず、0～2歳児の乳幼児が通うための施設ができたことで、そこに通う保護者達が自分の子どもの育ちや子育ての楽しさを語り合いながら、だんだん自分の子どもを大切にするようになり、そのような地域や街を作り上げていったという例もある。
広島市で何ができるかを考えるためには、中核となるセンターの大きなビジョンが必要である。少子化の中、幼稚園・保育園等の枠組みにとらわれない方向性があるともよいのではないかな。
- 2分化している保護者の話は、現場で実感している。大切な幼児期に、子どもとしっかり向き合って、子育ての面白さや成長の喜びを保護者に感じてもらう仕組みを作っていくことが、私たち園等の保育者の役目だと思う。
- 今年度の小学校では、コロナ禍で保護者を学校に招いての活動ができず、保護者同士のつながりを持つことが難しかった。特に、新しく入学してきた1年生の保護者同士が関わる活動がほとんどできなかったことが気がかりである。子ども達は学校に来ることですな

がることができたが、保護者同士はそれができていない。来年度は、それを補うことができるのか心配だが、できるだけ保護者同士がつながることができるようなきっかけを作っていきたいと思っている。

また、保護者にはいろいろな環境の方がおり、子ども自身も育てやすい子どもと育てにくい子どもがいるように思う。関わり方次第で変わってくる場合もあると思われるが、生まれながらに難しい子どももいるかもしれない。保護者もいろいろと悩んでいて、苦労したりストレスを感じたりしており、そのような保護者にこそ、手立てや支援ができればと思っている。

- 母子保健の観点で言うと、0歳児からの健診を広島市ではほとんどの子どもが受けている。健診では子育ての悩みを保健師や医師に相談できるが、それ以外に相談できる場が少ないのではないのか。

子どもの育てづらは、子ども自身に起因するものもあるが、家族関係や家庭環境が原因の場合もある。家庭環境による困り感の場合は、悩みに応じる手立てがないことが多い。母子保健の観点で、健診時に得た保護者の悩みに関する情報を、幼稚園・保育園等につなげてもらえるとよいのではないのか。

働いておらず、自分で0～2歳児の子育てをしている中で困り感や悩みを持っている保護者に対して、情報を発信したり相談できる場を紹介したりするところが少ないように思う。ネグレクト等の課題も増えているように思う。センターでは、幼稚園・保育園等に通っているかどうかに関わらず、全ての就学前の子どもへの支援を行うことができるようにしてほしい。

- センターの取組の有無に関わらず、保護者と園等、行政が全体としてつながることが大切である。
- 全ての子どもに対して支援を行っていくことはもちろん大切である。センターが保護者に対して直接的な支援を行うことは現状では難しいが、今後は保護者と専門的な機関をつなぐ機能、つまりセンターがハブとして必要な支援を行うことができないか、検討していきたい。
- 子育て支援は、制度に位置付けられていることから当然行っているが、なぜ子育て支援が必要なのかを考えた時、孤立した子育てが行われているからなのではないか。子育ての支援の必要性を、園に改めて理解してもらう必要がある。なぜならば、子育ては、昔から共同養育で行われており、脳科学的にも遺伝子的にも、一人で子育てをするようにはなっていない。子育て支援をする人に対しても、しっかりとそういうことを教えていくことで、「親だからそれくらいできるでしょう。」などという心無い言葉も出なくなると思う。支援の本当の意味を知ることが、子育て支援を充実させることに繋がるのではないのか。
- 脳科学という話が出たが、これに関連して、今の保護者の困りごとやこれから大きくなる困りごとが課題につながるのではないのか。懸念されることとして、ICTやAIが進んでいくことが、乳幼児の成長にどのような影響を与えるのか、ということが言われ始めている。小学校でタブレットを使うようになることで、情報にさらされながら、今の保護者が新たな不安を感じることがあるかもしれないと推察している。それらを見通してセンターが、必要に応じて状況を受け止めることができるような情報を提供することも必要になってくる。各園等において、保護者の不安感が生じてくると思うので、情報共有を進めていかななくてはならない。
- 将来的な心配事もあるが、現実問題としては、マスクを外せない生活を強いられていることが一番問題だと思う。今年は年齢の低い子どもの言葉の発達が遅いと感じている。卒園した小学生が来園した際に、「学校で、友達や先生の顔が覚えられない。」と言っていた。このことと同様に、保育者が常にマスクをしていると、園では年齢が低い子どもほど

不安定になっていると感じている。

- マスクを着けていても、名札に顔写真を付けているところもあり、そうすることで顔全体が分かり易くなってよいと思う。今後もこの状況が長く続くかもしれないので、現場ではどう対応していくかが大切である。
- 小学校では、一年生の給食の際に、マスクを外して給食を食べた教師が、子どもから、「先生ってそんな顔していたんだね。」「そうやって笑うんだね。」と言われたそう。子どもは教師のマスクを外した顔を知らなかったし、感情も伝わりにくかったようだ。マスク生活は当面続くと思われ、仕方がない状況でもあるので、教師や保育者は、温かい表情や雰囲気伝えるように工夫することが必要である。
また、ICTについては、来年度の終わりまでには小学校・中学校の各校でタブレットを使って授業を行うことができるようになる見込みである。現在は、タブレットの望ましい使い方や、やってはいけないこと等について、教師向けのマニュアルを作成しており、校長会を通してその説明をする予定である。さらに、学校でタブレットを使えるようになった子ども達が、家庭でもパソコンやスマートフォンなどを使うことが想定されるため、保護者に対しても扱い方についての協力を依頼しなくてはならないと思っている。ICTについては、使えるようにならないといけないが、バランスを取りながら指導をしていくべきだと思う。
- 資料2「広島市幼児教育・保育ビジョン実施方針」の策定についての報告
- この実施方針がいかに具体化されるかが大切だと思う。今まで実施されていた取組が、どの項目につながっているのかということは、どこかで整理されているのか。
例えば、「小学校教育との円滑な接続に関する拠点機能」について、前回の懇談会で紹介されていた幼稚園・保育園等と小学校の先生の人事交流などは極めて画期的な取組だが、それをさらに発展させていくのであれば、具体的な取組として示されるべきではないか。方針として書かれていることに対して、これまではどう取り組んできて、今後はどう進めていくのか、という具体的なことが分からないので、取組の方向性が伝わって来にくい。この実施方針をどのように具体化されるのか、そのようなことが見えてくると、この会議でも問題点等を指摘し合えるのではないかと。実施方針と同時にその具体化の事例が示されるとよいのではないかと。
- 小学校教育との円滑な接続については、これまでも取り組んできているので、有効な取組や知見等を蓄積している。それらについて、拠点園の公開保育等を通じて成果を発信していき、それによって広島市全体の幼児教育・保育の質を向上していきたいと思っている。
- この実施方針は、ビジョンに基づきどのように取り組むか、という基本的な考え方と方向性を挙げている。実際の事業を進めるに当たっては、行政の仕組みとして、人とお金を確保しながらどのように事業展開していくかということになる。今回の実施方針のように基本的な方向性をまとめたものの中では、その部分まで表現するのは非常に難しいため、今回お示ししたのは、これからの取組の方向性ということで御理解いただきたい。
- 具体的な成果が上がるような取組を期待している。